

『漱石作品論集成』書誌（七）

まえがき

本稿は一九九〇（平成二）年十二月から一九九一（平成三）年十二月にかけて桜楓社（おうふう）より刊行された『漱石作品論集成』（玉井敬之監修 全十二巻、別巻一）収録論文の文献書誌の補遺編である。『漱石作品論集成』は主に一九三五年以降の漱石研究の成果を主要作品別に配列したものであり、漱石研究の達成を示す基本文献の一つとして現在では学界での評価も定着していると言えよう。同書には別巻を含めると三四一編もの論文及び漱石関係記事（他に企画・編集委員による鼎談十二・解説二）が収録されている。

本書誌においては『漱石作品論集成別巻漱石関係記事及び文献』に収録された名取春仙『明暗』挿絵百八十八枚に係わる書誌事項の作成を今回試みた。

村田好哉

『漱石作品論集成別巻漱石関係記事及び文献』

名取春仙『明暗』挿絵

『明暗』挿絵百八十八枚は「東京朝日新聞」（東京朝日新聞社）第一〇七三四号、一九一六（大正五）年五月二十六日「金曜」から同第一〇九三六号、同年十二月十四日「木曜」にわたり連載された『明暗』一〇百八十八に毎回掲載されたものである。ただし以下の日付の「東京朝日新聞」には『明暗』は掲載されていない。一九一六（大正五）年六月七日「水曜」・六月十二日「月曜」・六月二十九日「木曜」・七月十七日「月曜」・九月一日「金曜」・九月六日「水曜」・九月十七日「日曜」・九月二十八日「木曜」・十月九日「月曜」・十月二十三日「月曜」・十一月一日「水曜」・十一月十三日「月曜」・十一月二十四日「金曜」・十一月三十日「木曜」。

なお同時期に「大阪朝日新聞」夕刊に連載されていた『明暗』第一回（第百八十八回）第九五二一号（第九六三〇号、大阪朝日新聞社、一九一六（大正五）年五月二十六日）「金曜」

十二月二十六日「火曜」には挿絵は掲載されていない。

↓『夏目漱石遺墨集別冊』収録 漱石の新聞小説題字カット

挿画一覽 49～69頁 明暗 62～69頁 石崎 等・中島国彦・芳賀 徹・紅野敏郎・内田道雄・古川 久著 求龍堂

'80 (昭和55) 年3月25日

↓『朝日新聞〈復刻版〉』④7大正5年5月 自一〇七〇九号至

一〇七三九号』収録 日本図書センター '90 (平成2) 年5月25日

『朝日新聞〈復刻版〉』④8大正5年6月 自一〇七四〇号至

一〇七六九号』収録 同右

『朝日新聞〈復刻版〉』④9大正5年7月 自一〇七七〇号至

一〇八〇〇号』収録 同右

『朝日新聞〈復刻版〉』⑤0大正5年8月 自一〇八〇一号至

一〇八三二号』収録 同右

『朝日新聞〈復刻版〉』⑤1大正5年9月 自一〇八三二号至

一〇八六一号』収録 同右

『朝日新聞〈復刻版〉』⑤2大正5年10月 自一〇八六二号至

一〇八九二号』収録 同右

『朝日新聞〈復刻版〉』⑤3大正5年11月 自一〇八九三号至

一〇九二三号』収録 同右

『朝日新聞〈復刻版〉』⑤4大正5年12月 自一〇九二三号至

一〇九五三号』収録 同右

↓『漱石作品論集成別巻漱石関係記事及び文献』収録「明

暗」挿絵①～⑧ 138～160頁 堀部功夫・村田好哉編 桜

楓社 '91 (平成3) 年12月10日

↓『漱石新聞小説復刻全集第十卷明暗』収録 明暗第一回～

第百八十八回 8～391頁 監修者山下 浩 ゆまに書房

'99 (平成11) 年9月24日

本書誌では『明暗』挿絵に関する書誌事項を①「東京朝日

新聞」、②『夏目漱石遺墨集別冊』(求龍堂)、③『朝日新聞〈復

刻版〉』④7(～⑤4)大正5年5月(～12月) 自一〇七〇九号(至

一〇九五三号)』(日本図書センター)、④『漱石作品論集成

別巻漱石関係記事及び文献』(桜楓社)、⑤『漱石新聞小説復

刻全集第十卷明暗』(ゆまに書房) について以下掲げる。

なお初出紙である①「東京朝日新聞」については各回冒頭の九字分を参考までに記した上で、必要な書誌事項を掲げた。

②については ↓遺墨集、③については ↓朝日版④7(～⑤4)、

④については ↓集成、⑤については ↓ゆまに版 と各々

略記した上で、挿絵の再録状況を明らかにするために当該の

章、節の数字及び挿絵掲載のページ数を各末尾に掲げた。た

だし③『朝日新聞〈復刻版〉』④7(～⑤4)についてはページ

数の記載がないため稿者において通ページを記した。また利

用者の便宜を図るために⑥『漱石全集第十一卷明暗』(岩波

書店、二〇〇三「平成十五」年二月七日 第二刷)の該当す

る章、節の数字及びページ数を ↓ 岩波版 と略記した上で掲げた。

明暗 (第一回) 医者は探りを入れた 「東京朝日新聞」 第

一〇七三四号 (六) 面 東京朝日新聞社 '16 (大正5) 年

5月26日「金曜」 ↓ 『夏目漱石遺墨集別冊』 求龍堂 明

暗 (1) 62頁 ↓ 『朝日新聞 (復刻版)』 ④ 大正5年5月『日本

図書センター』 明暗 挿絵一 208頁 ↓ 『漱石作品論集成別

巻漱石関係記事及び文献』 桜楓社 「明暗」 挿絵① 138頁

↓ 『漱石新聞小説復刻全集第十卷明暗』 ゆまに書房 明

暗 挿絵一 8 ↓ 9頁 ↓ 『漱石全集第十一卷明暗』 岩波書

店 明暗一 3 ↓ 6頁

明暗 第二回 電車に乗つた時の彼 第一〇七三五号 (六)

面 5月27日「土曜」 ↓ 遺墨集 (2) 62頁 ↓ 朝日版 ④ 二

216頁 ↓ 集成② 138頁 ↓ ゆまに版二 10 ↓ (11) 頁 ↓ 岩波版

二 6 ↓ 8頁

明暗 第三回 角を曲つて細い小路 第一〇七三六号 (六)

面 5月28日「日曜」 ↓ 遺墨集 (3) 62頁 ↓ 朝日版 ④ 三

224頁 ↓ 集成③ 138頁 ↓ ゆまに版三 12 ↓ 13頁 ↓ 岩波版 三

9 ↓ 12頁

明暗 第四回 細君は色の白い女で 第一〇七三七号 (六)

面 5月29日「月曜」 ↓ 遺墨集 (4) 62頁 ↓ 朝日版 ④ 四

232頁 ↓ 集成④ 138頁 ↓ ゆまに版四 14 ↓ 15頁 ↓ 岩波版四

12 ↓ 15頁

明暗 第五回 寐る前の一時間か二 第一〇七三八号 (六)

面 5月30日「火曜」 ↓ 遺墨集 (5) 62頁 ↓ 朝日版 ④ 五

240頁 ↓ 集成⑤ 138頁 ↓ ゆまに版五 16 ↓ 17頁 ↓ 岩波版五

15 ↓ 17頁

明暗 第六回 「おいお延」 彼は襖 第一〇七三九号 (六)

面 5月31日「水曜」 ↓ 遺墨集 (6) 62頁 ↓ 朝日版 ④ 六

248頁 ↓ 集成⑥ 138頁 ↓ ゆまに版六 18 ↓ 19頁 ↓ 岩波版六

17 ↓ 20頁

明暗 第七回 「今月は何時も通り 第一〇七四〇号 (六)

面 6月1日「木曜」 ↓ 遺墨集 (7) 62頁 ↓ 朝日版 ④ 七

7頁 ↓ 集成⑦ 138頁 ↓ ゆまに版七 20 ↓ 21頁 ↓ 岩波版七

20 ↓ 23頁

明暗 第八回 「厭よ、あたし」 お 第一〇七四一号 (六)

面 6月2日「金曜」 ↓ 遺墨集 (8) 62頁 ↓ 朝日版 ④ 八

14頁 ↓ 集成⑧ 138頁 ↓ ゆまに版八 22 ↓ 23頁 ↓ 岩波版八

23 ↓ 26頁

明暗 第九回 翌日津田は例の如く 第一〇七四二号 (六)

面 6月3日「土曜」 ↓ 遺墨集 (9) 62頁 ↓ 朝日版 ④ 九

22頁 ↓ 集成⑨ 139頁 ↓ ゆまに版九 24 ↓ 25頁 ↓ 岩波版九

26 ↓ 29頁

明暗 第十回 厳めしい表玄関の戸 第一〇七四三号 (六)

面 6月4日「日曜」 ↓ 遺墨集 (10) 62頁 ↓ 朝日版 ④ 十

30頁↓集成⑩ 139頁↓ゆまに版十 26頁↓27頁↓岩波版十
29頁↓33頁

明暗 第十一回 吉川の細君は斯んな 第一〇七四四号

(六)面 6月5日「月曜」↓遺墨集(11) 62頁↓朝日版④⑧

十一 38頁↓集成⑪ 139頁↓ゆまに版十一 28頁↓29頁↓岩

波版十一 33頁↓36頁

明暗 第十二回 其時二人の頭の上に 第一〇七四五号

(六)面 6月6日「火曜」↓遺墨集(12) 62頁↓朝日版④⑧

十二 46頁↓集成⑫ 139頁↓ゆまに版十二 30頁↓31頁↓岩

波版十二 36頁↓39頁

明暗 第十三回 往来へ出た津田の足 第一〇七四七号

(六)面 6月8日「木曜」↓遺墨集(13) 63頁↓朝日版④⑧

十三 62頁↓集成⑬ 139頁↓ゆまに版十三 32頁↓33頁↓岩

波版十三 39頁↓41頁

明暗 第十四回 津田は同じ気分です 第一〇七四八号

(六)面 6月9日「金曜」↓遺墨集(14) 63頁↓朝日版

④⑧ 十四 70頁↓集成⑭ 139頁↓ゆまに版十四 34頁↓35頁

↓岩波版十四 41頁↓44頁

明暗 第十五回 西洋流のレターペー 第一〇七四九号

(六)面 6月10日「土曜」↓遺墨集(15) 62頁↓朝日版④⑧

十五 78頁↓集成⑮ 139頁↓ゆまに版十五 36頁↓37頁↓岩

波版十五 44頁↓47頁

明暗 第十六回 翌日の午後津田は呼 第一〇七五〇号

(六)面 6月11日「日曜」↓遺墨集(16) 63頁↓朝日版④⑧

十六 86頁↓集成⑯ 139頁↓ゆまに版十六 38頁↓39頁↓岩

波版十六 48頁↓50頁

明暗 第十七回 其日の帰りがけに津 第一〇七五二号

(六)面 6月13日「火曜」↓遺墨集(17) 63頁↓朝日版④⑧

十七 102頁↓集成⑰ 140頁↓ゆまに版十七 40頁↓41頁↓岩

波版十七 51頁↓53頁

明暗 第十八回 津田の宅へ帰つたの 第一〇七五三号

(六)面 6月14日「水曜」↓遺墨集(18) 63頁↓朝日版④⑧

十八 110頁↓集成⑱ 140頁↓ゆまに版十八 42頁↓43頁↓岩

波版十八 54頁↓56頁

明暗 第十九回 津田の明る朝眼を覚 第一〇七五四号

(六)面 6月15日「木曜」↓遺墨集(19) 63頁↓朝日版④⑧

十九 118頁↓集成⑲ 140頁↓ゆまに版十九 44頁↓45頁↓岩

波版十九 57頁↓60頁

明暗 第二十回 藤井といふのは津田 第一〇七五五号

(五)面 6月16日「金曜」↓遺墨集(20) 63頁↓朝日版④⑧

二十 125頁↓集成⑳ 140頁↓ゆまに版二十 46頁↓47頁↓岩

波版二十 60頁↓63頁

明暗 第二十一回 斯ういふ人になりが 第一〇七五六号

(六)面 6月17日「土曜」↓遺墨集(21) 63頁↓朝日版④⑧

二十一 134頁↓集成㉑ 140頁↓ゆまに版二十一 48頁↓49頁

↓岩波版二十一 63頁↓66頁

明暗 第二十二回 「お父さんは何うし 第一〇七五七号

(六) 面 6月18日「日曜」→遺墨集(22) 63頁→朝日版(48)
二十二 142頁→集成(22) 140頁→ゆまに版二十二 50頁→51頁
↓岩波版二十二 66頁→69頁

明暗 第二十三回 「真事そりや好い靴 第一〇七五八号

(六) 面 6月19日「月曜」→遺墨集(23) 63頁→朝日版(48)
二十三 150頁→集成(23) 140頁→ゆまに版二十三 52頁→53頁
↓岩波版二十三 69頁→72頁

明暗 第二十四回 「御前近頃岡本の所 第一〇七五九号

(六) 面 6月20日「火曜」→遺墨集(24) 63頁→朝日版(48)
二十四 158頁→集成(24) 140頁→ゆまに版二十四 54頁→55頁
↓岩波版二十四 72頁→75頁

明暗 第二十五回 座敷で誰かと話をし 第一〇七六〇号

(六) 面 6月21日「水曜」→遺墨集(25) 63頁→朝日版(48)
二十五 167頁→集成(25) 141頁→ゆまに版二十五 56頁→57頁
↓岩波版二十五 75頁→78頁

明暗 第二十六回 津田は客間にゐる声 第一〇七六一号

(六) 面 6月22日「木曜」→遺墨集(26) 63頁→朝日版(48)
二十六 174頁→集成(26) 141頁→ゆまに版二十六 58頁→59頁
↓岩波版二十六 78頁→81頁

明暗 第二十七回 斯ういう時に、責め 第一〇七六二号

(六) 面 6月23日「金曜」→遺墨集(27) 63頁→朝日版(48)
二十七 182頁→集成(27) 141頁→ゆまに版二十七 60頁→61頁

↓岩波版二十七 81頁→84頁

明暗 第二十八回 奥の四畳半で先刻か 第一〇七六三号

(六) 面 6月24日「土曜」→遺墨集(28) 63頁→朝日版(48)
二十八 190頁→集成(28) 141頁→ゆまに版二十八 62頁→63頁
↓岩波版二十八 84頁→87頁

明暗 第二十九回 何時の間にか勝手口 第一〇七六四号

(六) 面 6月25日「日曜」→遺墨集(29) 63頁→朝日版(48)
二十九 198頁→集成(29) 141頁→ゆまに版二十九 64頁→65頁
↓岩波版二十九 87頁→90頁

明暗 第三十回 それでも座は白けて 第一〇七六五号

(六) 面 6月26日「月曜」→遺墨集(30) 63頁→朝日版(48)
三十 206頁→集成(30) 141頁→ゆまに版三十 66頁→67頁(本文は66頁→69頁)→岩波版三十 90頁→94頁

明暗 第三十一回 「大分八釜しくなつ 第一〇七六六号

(六) 面 6月27日「火曜」→遺墨集(31) 63頁→朝日版(48)
三十一 214頁→集成(31) 141頁→ゆまに版三十一 70頁→71頁
↓岩波版三十一 94頁→98頁

明暗 第三十二回 食後の話はもうはづ 第一〇七六七号

(六) 面 6月28日「水曜」→遺墨集(32) 63頁→朝日版(48)
三十二 222頁→集成(32) 141頁→ゆまに版三十二 72頁→73頁
(本文は72頁→75頁)→岩波版三十二 98頁→102頁

明暗 第三十三回 戸外には風もなかつ 第一〇七六九号

(六) 面 6月30日「金曜」→遺墨集(33) 63頁→朝日版(48)

三十三 238頁↓集成③ 142頁↓ゆまに版三十三 76〜77頁
↓岩波版三十三 102〜105頁

明暗 第三十四回 順路からいふと、津 第一〇七七〇号

(六) 面 7月1日「土曜」↓遺墨集③ 63頁↓朝日版④
三十四 6頁↓集成④ 142頁↓ゆまに版三十四 78〜79頁
↓岩波版三十四 105〜109頁

明暗 第三十五回 インブネスを着た小 第一〇七七一号

(六) 面 7月2日「日曜」↓遺墨集⑤ 63頁↓朝日版④
三十五 14頁↓集成⑤ 142頁↓ゆまに版三十五 80〜81頁
↓岩波版三十五 109〜112頁

明暗 第三十六回 不幸にして津田の心 第一〇七七二号

(六) 面 7月3日「月曜」↓遺墨集⑥ 63頁↓朝日版④
三十六 20頁↓集成⑥ 142頁↓ゆまに版三十六 82〜83頁
↓岩波版三十六 112〜115頁

明暗 第三十七回 先刻から二人の様子 第一〇七七三号

(六) 面 7月4日「火曜」↓遺墨集⑦ 63頁↓朝日版④
三十七 30頁↓集成⑦ 142頁↓ゆまに版三十七 84〜85頁
↓岩波版三十七 115〜119頁

明暗 第三十八回 彼の門は例の通り締 第一〇七七四号

(六) 面 7月5日「水曜」↓遺墨集⑧ 63頁↓朝日版④
三十八 38頁↓集成⑧ 142頁↓ゆまに版三十八 86〜87頁
↓岩波版三十八 119〜123頁

明暗 第三十九回 あくる朝の津田は、 第一〇七七五号

(六) 面 7月6日「木曜」↓遺墨集⑨ 63頁↓朝日版④
三十九 46頁↓集成⑨ 142頁↓ゆまに版三十九 88〜89頁
↓岩波版三十九 123〜126頁

明暗 第四十回 天氣が好いので幌を 第一〇七七六号

(六) 面 7月7日「金曜」↓遺墨集⑩ 63頁↓朝日版④
四十 54頁↓集成⑩ 143頁↓ゆまに版四十 90〜91頁↓岩
波版四十 126〜130頁

明暗 第四十一回 其所へ先刻の看護婦 第一〇七七七号

(五) 面 7月8日「土曜」↓遺墨集⑪ 64頁↓朝日版④
四十一 61頁↓集成⑪ 143頁↓ゆまに版四十一 92〜93頁
↓岩波版四十一 130〜133頁

明暗 第四十二回 「リチネはお飲みで 第一〇七七八号

(六) 面 7月9日「日曜」↓遺墨集⑫ 64頁↓朝日版④
四十二 72頁↓集成⑫ 143頁↓ゆまに版四十二 94〜95頁
↓岩波版四十二 133〜137頁

明暗 第四十三回 診察室を出るとき、 第一〇七七九号

(六) 面 7月10日「月曜」↓遺墨集⑬ 64頁↓朝日版④
四十三 80頁↓集成⑬ 143頁↓ゆまに版四十三 96〜97頁
↓岩波版四十三 137〜140頁

明暗 第四十四回 津田は書物に手を触 第一〇七八〇号

(六) 面 7月11日「火曜」↓遺墨集⑭ 64頁↓朝日版④
四十四 88頁↓集成⑭ 143頁↓ゆまに版四十四 98〜99頁
↓岩波版四十四 141〜144頁

明暗 第四十五回 手術後の夫を、やつ 第一〇七八一号

(五) 面 7月12日「水曜」↓遺墨集(45) 64頁↓朝日版(49)
四十五 95頁↓集成(45) 143頁↓ゆまに版四十五 100頁
↓岩波版四十五 145頁

明暗 第四十六回 「能く来られたのね 第一〇七八二号

(六) 面 7月13日「木曜」↓遺墨集(46) 64頁↓朝日版(49)
四十六 106頁↓集成(46) 143頁↓ゆまに版四十六 102頁
↓岩波版四十六 148頁

明暗 第四十七回 手前勝手な男として 第一〇七八三号

(五) 面 7月14日「金曜」↓遺墨集(47) 64頁↓朝日版(49)
四十七 113頁↓集成(47) 143頁↓ゆまに版四十七 104頁
↓岩波版四十七 151頁

明暗 第四十八回 其所から見渡した外 第一〇七八四号

(六) 面 7月15日「土曜」↓遺墨集(48) 64頁↓朝日版(49)
四十八 122頁↓集成(48) 144頁↓ゆまに版四十八 106頁
↓岩波版四十八 155頁

明暗 第四十九回 場中の様子は先刻見 第一〇七八五号

(五) 面 7月16日「日曜」↓遺墨集(49) 64頁↓朝日版(49)
四十九 129頁↓集成(49) 144頁↓ゆまに版四十九 108頁
(本文は108頁) ↓岩波版四十九 158頁

明暗 第五十回 岡本の来たのはそれ 第一〇七八七号

(六) 面 7月18日「火曜」↓遺墨集(50) 64頁↓朝日版(49)
五十 148頁↓集成(50) 144頁↓ゆまに版五十 112頁
↓岩波版五十 113頁

波版五十 162頁

明暗 第五十一回 彼女が叔父叔母の後 第一〇七八八号

(六) 面 7月19日「水曜」↓遺墨集(51) 64頁↓朝日版(49)
五十一 156頁↓集成(51) 144頁↓ゆまに版五十一 114頁
↓岩波版五十一 166頁

明暗 第五十二回 叔母の云つた通り、 第一〇七八九号

(六) 面 7月20日「木曜」↓遺墨集(52) 64頁↓朝日版(49)
五十二 164頁↓集成(52) 144頁↓ゆまに版五十二 116頁
↓岩波版五十二 169頁

明暗 第五十三回 三好を中心にした洋 第一〇七九〇号

(六) 面 7月21日「金曜」↓遺墨集(53) 64頁↓朝日版(49)
五十三 172頁↓集成(53) 144頁↓ゆまに版五十三 118頁
↓岩波版五十三 172頁

明暗 第五十四回 彼等ほど多人数でな 第一〇七九一号

(六) 面 7月22日「土曜」↓遺墨集(54) 64頁↓朝日版(49)
五十四 180頁↓集成(54) 144頁↓ゆまに版五十四 120頁
↓岩波版五十四 176頁

明暗 第五十五回 彼等の席を立つたの 第一〇七九二号

(五) 面 7月23日「日曜」↓遺墨集(55) 64頁↓朝日版(49)
五十五 187頁↓集成(55) 144頁↓ゆまに版五十五 122頁
↓岩波版五十五 180頁

明暗 第五十六回 残りの時間を叔母の 第一〇七九三号

(六) 面 7月24日「月曜」↓遺墨集(56) 64頁↓朝日版(49)

五十六 198頁↓集成⑤⑥ 145頁↓ゆまに版五十六 124↓125頁

↓岩波版五十六 183↓187頁

明暗 第五十七回 津田の宅と略同じ方 第一〇七九四号

(六)面 7月25日「火曜」↓遺墨集⑤⑦ 64頁↓朝日版④⑨

五十七 206頁↓集成⑤⑦ 145頁↓ゆまに版五十七 126↓127頁

↓岩波版五十七 187↓190頁

明暗 第五十八回 彼女は枕の上で一時 第一〇七九五号

(六)面 7月26日「水曜」↓遺墨集⑤⑧ 64頁↓朝日版④⑨

五十八 214頁↓集成⑤⑧ 145頁↓ゆまに版五十八 128↓129頁

↓岩波版五十八 190↓193頁

明暗 第五十九回 お時の御給仕で朝食 第一〇七九六号

(六)面 7月27日「木曜」↓遺墨集⑤⑨ 64頁↓朝日版④⑨

五十九 222頁↓集成⑤⑨ 145頁↓ゆまに版五十九 130↓131頁

↓岩波版五十九 193↓196頁

明暗 第六十回 岡本の邸宅へ着いた 第一〇七九七号

(五)面 7月28日「金曜」↓遺墨集⑥⑩ 64頁↓朝日版④⑨

六十 229頁↓集成⑥⑩ 145頁↓ゆまに版六十 132↓133頁↓岩

波版六十 197↓200頁

明暗 第六十一回 小さいうちから彼の 第一〇七九八号

(五)面 7月29日「土曜」↓遺墨集⑥⑪ 64頁↓朝日版④⑨

六十一 239頁↓集成⑥⑪ 145頁↓ゆまに版六十一 (134)↓

135頁↓岩波版六十一 200↓204頁

明暗 第六十二回 親身の叔母よりも却 第一〇七九九号

(六)面 7月30日「日曜」↓遺墨集⑥⑫ 64頁↓朝日版④⑨

六十二 248頁↓集成⑥⑫ 145頁↓ゆまに版六十二 136↓137頁

↓岩波版六十二 204↓207頁

明暗 第六十三回 感傷的の気分を笑に 第一〇八〇〇号

(三)面 7月31日「月曜」↓遺墨集⑥⑬ 64頁↓朝日版④⑨

六十三 253頁↓集成⑥⑬ 145頁↓ゆまに版六十三 138↓139頁

↓岩波版六十三 207↓210頁

明暗 第六十四回 お延はその問題を其 第一〇八〇一号

(六)面 8月1日「火曜」↓遺墨集⑥⑭ 64頁↓朝日版④⑨

六十四 6頁↓集成⑥⑭ 146頁↓ゆまに版六十四 140↓141頁

↓岩波版六十四 211↓214頁

明暗 第六十五回 口先で斯んな押問答 第一〇八〇二号

(六)面 8月2日「水曜」↓遺墨集⑥⑮ 64頁↓朝日版④⑨

六十五 14頁↓集成⑥⑮ 146頁↓ゆまに版六十五 142↓143頁

↓岩波版六十五 214↓218頁

明暗 第六十六回 お延から見た継子は 第一〇八〇三号

(六)面 8月3日「木曜」↓遺墨集⑥⑯ 64頁↓朝日版④⑨

六十六 22頁↓集成⑥⑯ 146頁↓ゆまに版六十六 144↓145頁

↓岩波版六十六 218↓221頁

明暗 第六十七回 それは叔父が先刻玄 第一〇八〇四号

(六)面 8月4日「金曜」↓遺墨集⑥⑰ 64頁↓朝日版④⑨

六十七 30頁↓集成⑥⑰ 146頁↓ゆまに版六十七 146↓147頁

↓岩波版六十七 221↓225頁

明暗 第六十八回 叔父の顔を見るや否 第一〇八〇五号

(六) 面 8月5日「土曜」→遺墨集(68) 64頁→朝日版(50)

六十八 38頁→集成(68) 146頁→ゆまに版六十八 148頁

↓岩波版六十八 225頁

明暗 第六十九回 所へ何にも知らない 第一〇八〇六号

(六) 面 8月6日「日曜」→遺墨集(69) 64頁→朝日版(50)

六十九 46頁→集成(69) 146頁→ゆまに版六十九 150頁

↓岩波版六十九 228頁

明暗 第七十回 継子の居間は取りも 第一〇八〇七号

(六) 面 8月7日「月曜」→遺墨集(70) 65頁→朝日版(50)

七十 54頁→集成(70) 146頁→ゆまに版七十 152頁

↓岩波版七十 232頁

明暗 第七十一回 偶然の出来事がお延 第一〇八〇九号

(六) 面 8月9日「水曜」→遺墨集(71) 65頁→朝日版(50)

七十一 70頁→集成(71) 146頁→ゆまに版七十一 154頁

↓岩波版七十一 235頁

明暗 第七十二回 段々勾配の急になつ 第一〇八一〇号

(六) 面 8月10日「木曜」→遺墨集(72) 65頁→朝日版(50)

七十二 79頁→集成(72) 146頁→ゆまに版七十二(156) 157頁

↓岩波版七十二 238頁

明暗 第七十三回 其時廊下伝ひに聞こ 第一〇八一一号

(六) 面 8月11日「金曜」→遺墨集(73) 65頁→朝日版(50)

七十三 87頁→集成(73) 147頁→ゆまに版七十三(158) 159頁

頁→岩波版七十三 242頁

明暗 第七十四回 お延が下女から食事 第一〇八一二号

(六) 面 8月12日「土曜」→遺墨集(74) 65頁→朝日版(50)

七十四 94頁→集成(74) 147頁→ゆまに版七十四(160) 161頁

↓岩波版七十四 245頁

明暗 第七十五回 小供が一つ学校の同 第一〇八一三号

(六) 面 8月13日「日曜」→遺墨集(75) 65頁→朝日版(50)

七十五 102頁→集成(75) 147頁→ゆまに版七十五(162) 163頁

↓岩波版七十五 249頁

明暗 第七十六回 叔父は面白半分まだ 第一〇八一四号

(六) 面 8月14日「月曜」→遺墨集(76) 65頁→朝日版(50)

七十六 110頁→集成(76) 147頁→ゆまに版七十六 164頁

↓岩波版七十六 253頁

明暗 第七十七回 お延は叔父の送らせ 第一〇八一五号

(六) 面 8月15日「火曜」→遺墨集(77) 65頁→朝日版(50)

七十七 118頁→集成(77) 147頁→ゆまに版七十七 166頁

↓岩波版七十七 256頁

明暗 第七十八回 お延は其晚京都にゐ 第一〇八一六号

(六) 面 8月16日「水曜」→遺墨集(78) 65頁→朝日版(50)

七十八 126頁→集成(78) 147頁→ゆまに版七十八 168頁

↓岩波版七十八 260頁

明暗 第七十九回 始めて京都で津田に 第一〇八一七号

(六) 面 8月17日「木曜」→遺墨集(79) 65頁→朝日版(50)

七十九 134頁↓集成⁷⁹ 147頁↓ゆまに版七十九 170↓171頁
↓岩波版七十九 263↓266頁

明暗 第八十回 強い意志がお延の身 第一〇八一八号

(六) 面 8月18日「金曜」↓遺墨集⁸⁰ 65頁↓朝日版⁵⁰
八十 142頁↓集成⁸⁰ 147頁↓ゆまに版八十 172↓173頁↓岩
波版八十 266↓269頁

明暗 第八十一回 袖を口へ当ててくす 第一〇八一九号

(六) 面 8月19日「土曜」↓遺墨集⁸¹ 65頁↓朝日版⁵⁰
八十一 150頁↓集成⁸¹ 147頁↓ゆまに版八十一 174↓175頁
↓岩波版八十一 269↓272頁

明暗 第八十二回 「津田君は近頃大分 第一〇八二〇号

(六) 面 8月20日「日曜」↓遺墨集⁸² 65頁↓朝日版⁵⁰
八十二 158頁↓集成⁸² 148頁↓ゆまに版八十二 176↓177頁
↓岩波版八十二 272↓276頁

明暗 第八十三回 特殊の経過を有つた 第一〇八二一号

(六) 面 8月21日「月曜」↓遺墨集⁸³ 65頁↓朝日版⁵⁰
八十三 166頁↓集成⁸³ 148頁↓ゆまに版八十三 178↓179頁
↓岩波版八十三 276↓280頁

明暗 第八十四回 自分のまだ知らない 第一〇八二二号

(六) 面 8月22日「火曜」↓遺墨集⁸⁴ 65頁↓朝日版⁵⁰
八十四 174頁↓集成⁸⁴ 148頁↓ゆまに版八十四 180↓181頁
↓岩波版八十四 280↓284頁

明暗 第八十五回 小林の顔には皮肉の 第一〇八二三号

(六) 面 8月23日「水曜」↓遺墨集⁸⁵ 65頁↓朝日版⁵⁰
八十五 182頁↓集成⁸⁵ 148頁↓ゆまに版八十五 182↓183頁
↓岩波版八十五 284↓287頁

明暗 第八十六回 お延の心は此不思議 第一〇八二四号

(六) 面 8月24日「木曜」↓遺墨集⁸⁶ 65頁↓朝日版⁵⁰
八十六 190頁↓集成⁸⁶ 148頁↓ゆまに版八十六 184↓185頁
↓岩波版八十六 287↓290頁

明暗 第八十七回 お時は縁側へ坐つて 第一〇八二五号

(六) 面 8月25日「金曜」↓遺墨集⁸⁷ 65頁↓朝日版⁵⁰
八十七 198頁↓集成⁸⁷ 148頁↓ゆまに版八十七 186↓187頁
↓岩波版八十七 291↓294頁

明暗 第八十八回 二人の顔は一尺足ら 第一〇八二六号

(六) 面 8月26日「土曜」↓遺墨集⁸⁸ 65頁↓朝日版⁵⁰
八十八 206頁↓集成⁸⁸ 148頁↓ゆまに版八十八 188↓189頁
↓岩波版八十八 295↓298頁

明暗 第八十九回 幸ひにお時が下から 第一〇八二七号

(六) 面 8月27日「日曜」↓遺墨集⁸⁹ 65頁↓朝日版⁵⁰
八十九 214頁↓集成⁸⁹ 148頁↓ゆまに版八十九 190↓191頁
↓岩波版八十九 298↓301頁

明暗 第九十回 時間はいつか十二時 第一〇八二八号

(六) 面 8月28日「月曜」↓遺墨集⁹⁰ 65頁↓朝日版⁵⁰
九十 222頁↓集成⁹⁰ 148頁↓ゆまに版九十 192↓193頁↓岩
波版九十 302↓305頁

明暗 第九十一回 お延より一つ年上の 第一〇八二九号

(六) 面 8月29日「火曜」↓遺墨集(91) 65頁↓朝日版(50)

九十一 230頁↓集成(91) 148頁↓ゆまに版九十一 194頁

(195) 頁↓岩波版九十一 305頁

明暗 第九十二回 前の晩能く寐られな 第一〇八三〇号

(六) 面 8月30日「水曜」↓遺墨集(92) 65頁↓朝日版(50)

九十二 238頁↓集成(92) 149頁↓ゆまに版九十二 196頁

↓岩波版九十二 309頁

明暗 第九十三回 手術後局部に起る変 第一〇八三一号

(六) 面 8月31日「木曜」↓遺墨集(93) 65頁↓朝日版(50)

九十三 246頁↓集成(93) 149頁↓ゆまに版九十三 198頁

↓岩波版九十三 313頁

明暗 第九十四回 「またあの事だらう 第一〇八三三号

(六) 面 9月2日「土曜」↓遺墨集(94) 65頁↓朝日版(51)

九十四 10頁↓集成(94) 149頁↓ゆまに版九十四 200頁

↓岩波版九十四 316頁

明暗 第九十五回 津田は漸くお秀宛で 第一〇八三四号

(六) 面 9月3日「日曜」↓遺墨集(95) 65頁↓朝日版(51)

九十五 18頁↓集成(95) 149頁↓ゆまに版九十五 202頁

↓岩波版九十五 320頁

明暗 第九十六回 「一体何うしたら可 第一〇八三五号

(六) 面 9月4日「月曜」↓遺墨集(96) 65頁↓朝日版(51)

九十六 26頁↓集成(96) 149頁↓ゆまに版九十六 204頁

↓岩波版九十六 323頁

明暗 第九十七回 感情と理窟の纏れ合 第一〇八三六号

(六) 面 9月5日「火曜」↓遺墨集(97) 65頁↓朝日版(51)

九十七 34頁↓集成(97) 149頁↓ゆまに版九十七 206頁

↓岩波版九十七 326頁

明暗 第九十八回 然しお時のぢかに来 第一〇八三八号

(六) 面 9月7日「木曜」↓遺墨集(98) 66頁↓朝日版(51)

九十八 50頁↓集成(98) 149頁↓ゆまに版九十八 208頁

↓岩波版九十八 330頁

明暗 第九十九回 津田はお秀の口から 第一〇八三九号

(六) 面 9月8日「金曜」↓遺墨集(99) 66頁↓朝日版(51)

九十九 58頁↓集成(99) 149頁↓ゆまに版九十九 210頁

↓岩波版九十九 333頁

明暗 第一百回 然し二人はもう因果 第一〇八四〇号 (六)

面 9月9日「土曜」↓遺墨集(100) 66頁↓朝日版(51)

百 66頁↓集成(100) 150頁↓ゆまに版百 212頁

↓岩波版百 338頁

明暗 第一百一回 津田から見たお秀は 第一〇八四一号

(六) 面 9月10日「日曜」↓遺墨集(101) 66頁↓朝日版(51)

百一 74頁↓集成(101) 150頁↓ゆまに版百一 214頁

↓岩波版百一 342頁

明暗 第一百二回 「解りました」お秀 第一〇八四二号 (六)

面 9月11日「月曜」↓遺墨集(102) 66頁↓朝日版(51)

82頁↓集成⑩ 150頁↓ゆまに版百二 216頁↓217頁↓岩波版百二 346頁↓349頁

明暗 第三百三回 彼女が医者 of 玄関へ 第一〇八四三号

(六) 面 9月12日「火曜」↓遺墨集⁽¹⁰³⁾ 66頁↓朝日版⑤

百三 90頁↓集成⑩ 150頁↓ゆまに版百三 218頁↓219頁↓岩

波版百三 349頁↓353頁

明暗 第三百四回 二人は果してびたり 第一〇八四四号

(六) 面 9月13日「水曜」↓遺墨集⁽¹⁰⁴⁾ 66頁↓朝日版⑤

百四 98頁↓集成⑩ 150頁↓ゆまに版百四 220頁↓221頁↓岩

波版百四 353頁↓357頁

明暗 第三百五回 お延には夫の氣持が 第一〇八四五号

(六) 面 9月14日「木曜」↓遺墨集⁽¹⁰⁵⁾ 66頁↓朝日版⑤

百五 106頁↓集成⑩ 150頁↓ゆまに版百五 222頁↓223頁↓岩

波版百五 357頁↓361頁

明暗 第三百六回 「なに兄さんが強情 第一〇八四六号

(六) 面 9月15日「金曜」↓遺墨集⁽¹⁰⁶⁾ 66頁↓朝日版⑤

百六 114頁↓集成⑩ 150頁↓ゆまに版百六 224頁↓225頁↓岩

波版百六 361頁↓365頁

明暗 第三百七回 三人は妙な羽目に陥 第一〇八四七号

(六) 面 9月16日「土曜」↓遺墨集⁽¹⁰⁷⁾ 66頁↓朝日版⑤

百七 122頁↓集成⑩ 150頁↓ゆまに版百七 226頁↓227頁↓岩

波版百七 365頁↓369頁

明暗 第三百八回 彼女がわざとらしく 第一〇八四九号

(六) 面 9月18日「月曜」↓遺墨集⁽¹⁰⁸⁾ 66頁↓朝日版⑤

百八 138頁↓集成⑩ 151頁↓ゆまに版百八 228頁↓229頁↓岩

波版百八 369頁↓373頁

明暗 第三百九回 「実は先刻から云は 第一〇八五〇号

(六) 面 9月19日「火曜」↓遺墨集⁽¹⁰⁹⁾ 66頁↓朝日版⑤

百九 146頁↓集成⑩ 151頁↓ゆまに版百九 230頁↓231頁↓岩

波版百九 373頁↓376頁

明暗 第四百十回 「嫂さん何か仰しや 第一〇八五一号

(五) 面 9月20日「水曜」↓遺墨集⁽¹¹⁰⁾ 66頁↓朝日版⑤

百十 153頁↓集成⑩ 151頁↓ゆまに版百十 232頁↓233頁↓岩

波版百十 377頁↓380頁

明暗 第四百十一回 単に病院でお秀に出 第一〇八五二号

(六) 面 9月21日「木曜」↓遺墨集⁽¹¹¹⁾ 66頁↓朝日版⑤

百十一 164頁↓集成⑩ 151頁↓ゆまに版百十一 234頁↓235頁

↓岩波版百十一 380頁↓384頁

明暗 第四百十二回 久し振に夫と直に向 第一〇八五三号

(六) 面 9月22日「金曜」↓遺墨集⁽¹¹²⁾ 66頁↓朝日版⑤

百十二 172頁↓集成⑩ 151頁↓ゆまに版百十二 236頁↓237頁

↓岩波版百十二 384頁↓388頁

明暗 第四百十三回 二人は何時になく融 第一〇八五四号

(六) 面 9月23日「土曜」↓遺墨集⁽¹¹³⁾ 66頁↓朝日版⑤

百十三 180頁↓集成⑩ 151頁↓ゆまに版百十三 238頁↓239頁

↓岩波版百十三 388頁↓391頁

明暗 第百十四回 前夜よく寐られなか 第一〇八五五号

(六) 面 9月24日「日曜」→遺墨集⁽¹¹⁴⁾ 66頁→朝日版⁽⁵¹⁾
百十四 185頁→集成⁽¹¹⁴⁾ 151頁→ゆまに版百十四 240頁
↓岩波版百十四 391頁

明暗 第百十五回 下から上つて来た医 第一〇八五六号

(六) 面 9月25日「月曜」→遺墨集⁽¹¹⁵⁾ 66頁→朝日版⁽⁵¹⁾
百十五 194頁→集成⁽¹¹⁵⁾ 151頁→ゆまに版百十五 242頁
↓岩波版百十五 395頁

明暗 第百十六回 津田は纏まらない事 第一〇八五七号

(六) 面 9月26日「火曜」→遺墨集⁽¹¹⁶⁾ 66頁→朝日版⁽⁵¹⁾
百十六 202頁→集成⁽¹¹⁶⁾ 152頁→ゆまに版百十六 244頁
↓岩波版百十六 399頁

明暗 第百十七回 津田が小林に本音を 第一〇八五八号

(六) 面 9月27日「水曜」→遺墨集⁽¹¹⁷⁾ 66頁→朝日版⁽⁵¹⁾
百十七 210頁→集成⁽¹¹⁷⁾ 152頁→ゆまに版百十七 246頁
↓岩波版百十七 402頁

明暗 第百十八回 故意だか偶然だか、 第一〇八六〇号

(六) 面 9月29日「金曜」→遺墨集⁽¹¹⁸⁾ 66頁→朝日版⁽⁵¹⁾
百十八 226頁→集成⁽¹¹⁸⁾ 152頁→ゆまに版百十八 248頁
↓岩波版百十八 406頁

明暗 第百十九回 然し彼の驚ろかし方 第一〇八六一号

(六) 面 9月30日「土曜」→遺墨集⁽¹¹⁹⁾ 66頁→朝日版⁽⁵¹⁾
百十九 234頁→集成⁽¹¹⁹⁾ 152頁→ゆまに版百十九 250頁

↓岩波版百十九 411頁

明暗 第百二十回 小林はこゝだといふ 第一〇八六二号

(六) 面 10月1日「日曜」→遺墨集⁽¹²⁰⁾ 66頁→朝日版⁽⁵²⁾
百二十 6頁→集成⁽¹²⁰⁾ 152頁→ゆまに版百二十 252頁
↓岩波版百二十 415頁

明暗 第百二十一回 津田の頭に二つのも 第一〇八六三号

(六) 面 10月2日「月曜」→遺墨集⁽¹²¹⁾ 66頁→朝日版⁽⁵²⁾
百二十一 14頁→集成⁽¹²¹⁾ 152頁→ゆまに版百二十一 254頁
↓岩波版百二十一 418頁

明暗 第百二十二回 津田はすぐ第二の予 第一〇八六四号

(五) 面 10月3日「火曜」→遺墨集⁽¹²²⁾ 66頁→朝日版⁽⁵²⁾
百二十二 21頁→集成⁽¹²²⁾ 152頁→ゆまに版百二十二 256頁
↓岩波版百二十二 422頁

明暗 第百二十三回 堀の家は大略の見当 第一〇八六五号

(六) 面 10月4日「水曜」→遺墨集⁽¹²³⁾ 66頁→朝日版⁽⁵²⁾
百二十三 32頁→集成⁽¹²³⁾ 152頁→ゆまに版百二十三 258頁
↓岩波版百二十三 426頁

明暗 第百二十四回 昨日孫を伴れて横浜 第一〇八六六号

(六) 面 10月5日「木曜」→遺墨集⁽¹²⁴⁾ 66頁→朝日版⁽⁵²⁾
百二十四 40頁→集成⁽¹²⁴⁾ 153頁→ゆまに版百二十四 260頁
↓岩波版百二十四 429頁

明暗 第百二十五回 お延は次に藤井から 第一〇八六七号

(六) 面 10月6日「金曜」→遺墨集⁽¹²⁵⁾ 67頁→朝日版⁽⁵²⁾

百二十五 48頁↓集成⁽¹²⁵⁾ 153頁↓ゆまに版百二十五 262
 263頁↓岩波版百二十五 433頁↓435頁

明暗 第二百二十六回 お秀の口を洩れた意 第一〇八六八号

(六) 面 10月7日「土曜」↓遺墨集⁽¹²⁶⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾
 百二十六 56頁↓集成⁽¹²⁶⁾ 153頁↓ゆまに版百二十六 264
 265頁↓岩波版百二十六 436頁↓439頁

明暗 第二百二十七回 「さう云はれると、 第一〇八六九号

(六) 面 10月8日「日曜」↓遺墨集⁽¹²⁷⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾
 百二十七 64頁↓集成⁽¹²⁷⁾ 153頁↓ゆまに版百二十七 266
 267頁↓岩波版百二十七 439頁↓442頁

明暗 第二百二十八回 彼女は思ひ切つて一 第一〇八七一号

(五) 面 10月10日「火曜」↓遺墨集⁽¹²⁸⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾
 百二十八 79頁↓集成⁽¹²⁸⁾ 153頁↓ゆまに版百二十八 268
 269頁↓岩波版百二十八 442頁↓446頁

明暗 第二百二十九回 咄嗟の衝動に支配さ 第一〇八七二号

(六) 面 10月11日「水曜」↓遺墨集⁽¹²⁹⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾
 百二十九 90頁↓集成⁽¹²⁹⁾ 153頁↓ゆまに版百二十九 270
 271頁↓岩波版百二十九 446頁↓450頁

明暗 第二百三十回 お秀の言訳はお延に 第一〇八七三号

(六) 面 10月12日「木曜」↓遺墨集⁽¹³⁰⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾
 百三十 98頁↓集成⁽¹³⁰⁾ 153頁↓ゆまに版百三十 272
 ↓岩波版百三十 450頁↓454頁

明暗 第二百三十一回 お延とお秀が対坐し 第一〇八七四号

(六) 面 10月13日「金曜」↓遺墨集⁽¹³¹⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾
 百三十一 106頁↓集成⁽¹³¹⁾ 153頁↓ゆまに版百三十一 274
 275頁↓岩波版百三十一 454頁↓458頁

明暗 第二百三十二回 津田の好奇心は動い 第一〇八七五号

(六) 面 10月14日「土曜」↓遺墨集⁽¹³²⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾
 百三十二 114頁↓集成⁽¹³²⁾ 154頁↓ゆまに版百三十二 276
 277頁↓岩波版百三十二 458頁↓462頁

明暗 第二百三十三回 伶俐な性分に似合は 第一〇八七六号

(五) 面 10月15日「日曜」↓遺墨集⁽¹³³⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾
 百三十三 121頁↓集成⁽¹³³⁾ 154頁↓ゆまに版百三十三 278
 279頁↓岩波版百三十三 462頁↓466頁

明暗 第二百三十四回 津田には此誤解を誤 第一〇八七七号

(六) 面 10月16日「月曜」↓遺墨集⁽¹³⁴⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾
 百三十四 132頁↓集成⁽¹³⁴⁾ 154頁↓ゆまに版百三十四 280
 281頁↓岩波版百三十四 466頁↓469頁

明暗 第二百三十五回 津田は已を得ず訊い 第一〇八七八号

(六) 面 10月17日「火曜」↓遺墨集⁽¹³⁵⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾
 百三十五 140頁↓集成⁽¹³⁵⁾ 154頁↓ゆまに版百三十五 282
 283頁↓岩波版百三十五 469頁↓473頁

明暗 第二百三十六回 津田は今日迄斯うい 第一〇八七九号

(三) 面 10月18日「水曜」↓遺墨集⁽¹³⁶⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾
 百三十六 145頁↓集成⁽¹³⁶⁾ 154頁↓ゆまに版百三十六 284
 285頁↓岩波版百三十六 473頁↓477頁

明暗 第三百三十七回 何んな注文が夫人の 第一〇八八〇号

(六) 面 10月19日「木曜」↓遺墨集⁽¹³⁷⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾

百三十七 154頁↓集成⁽¹³⁷⁾ 154頁↓ゆまに版百三十七 286

287頁↓岩波版百三十七 477

481頁

明暗 第三百三十八回 話してゐるうちに、 第一〇八八一号

(六) 面 10月20日「金曜」↓遺墨集⁽¹³⁸⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾

百三十八 162頁↓集成⁽¹³⁸⁾ 154頁↓ゆまに版百三十八 288

289頁↓岩波版百三十八 481

485頁

明暗 第三百三十九回 夫人はもう未練のあ 第一〇八八二号

(六) 面 10月21日「土曜」↓遺墨集⁽¹³⁹⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾

百三十九 170頁↓集成⁽¹³⁹⁾ 154頁↓ゆまに版百三十九 290

291頁↓岩波版百三十九 485

490頁

明暗 第四百四十回 準備は略出来上つた 第一〇八八三号

(六) 面 10月22日「日曜」↓遺墨集⁽¹⁴⁰⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾

百四十 178頁↓集成⁽¹⁴⁰⁾ 155頁↓ゆまに版百四十 292

293頁

↓岩波版百四十 490

494頁

明暗 第四百四十一回 旅費を貰つて、勤向 第一〇八八五号

(六) 面 10月24日「火曜」↓遺墨集⁽¹⁴¹⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾

百四十一 194頁↓集成⁽¹⁴¹⁾ 155頁↓ゆまに版百四十一 294

295頁↓岩波版百四十一 494

497頁

明暗 第四百四十二回 然し夫人と津田の間 第一〇八八六号

(六) 面 10月25日「水曜」↓遺墨集⁽¹⁴²⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾

百四十二 202頁↓集成⁽¹⁴²⁾ 155頁↓ゆまに版百四十二 296

297頁↓岩波版百四十二 497

501頁

明暗 第四百四十三回 此時お延の足は既に 第一〇八八七号

(六) 面 10月26日「木曜」↓遺墨集⁽¹⁴³⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾

百四十三 210頁↓集成⁽¹⁴³⁾ 155頁↓ゆまに版百四十三 298

299頁↓岩波版百四十三 501

504頁

明暗 第四百四十四回 お延は日のとほく 第一〇八八八号

(六) 面 10月27日「金曜」↓遺墨集⁽¹⁴⁴⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾

百四十四 218頁↓集成⁽¹⁴⁴⁾ 155頁↓ゆまに版百四十四 300

301頁↓岩波版百四十四 504

508頁

明暗 第四百四十五回 それは看護婦に取つ 第一〇八八九号

(五) 面 10月28日「土曜」↓遺墨集⁽¹⁴⁵⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾

百四十五 225頁↓集成⁽¹⁴⁵⁾ 155頁↓ゆまに版百四十五 302

303頁↓岩波版百四十五 508

512頁

明暗 第四百四十六回 「小林なんか逢ふ 第一〇八九〇号

(六) 面 10月29日「日曜」↓遺墨集⁽¹⁴⁶⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾

百四十六 236頁↓集成⁽¹⁴⁶⁾ 155頁↓ゆまに版百四十六 304

305頁↓岩波版百四十六 513

517頁

明暗 第四百四十七回 お延は夫より自分の 第一〇八九一号

(六) 面 10月30日「月曜」↓遺墨集⁽¹⁴⁷⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾

百四十七 244頁↓集成⁽¹⁴⁷⁾ 155頁↓ゆまに版百四十七 306

307頁↓岩波版百四十七 517

521頁

明暗 第四百四十八回 津田の言葉つきなり 第一〇八九二号

(六) 面 10月31日「火曜」↓遺墨集⁽¹⁴⁸⁾ 67頁↓朝日版⁽⁵²⁾

百四十八 252頁→集成⁽¹⁴⁾ 156頁→ゆまに版百四十八 308頁
 309頁→岩波版百四十八 521頁→525頁

明暗 第四百四十九回 遮二無二津田を突き 第一〇八九四号

(六) 面 11月2日「木曜」→遺墨集⁽¹⁴⁹⁾ 67頁→朝日版⁽⁵³⁾
 百四十九 10頁→集成⁽¹⁴⁹⁾ 156頁→ゆまに版百四十九 310頁
 311頁→岩波版百四十九 525頁→529頁

明暗 第五百十回 妥協といふ漢語が此 第一〇八九五号

(五) 面 11月3日「金曜」→遺墨集⁽¹⁵⁰⁾ 67頁→朝日版⁽⁵³⁾
 百五十 17頁→集成⁽¹⁵⁰⁾ 156頁→ゆまに版百五十 312頁→313頁
 ↓岩波版百五十 529頁→532頁

明暗 第五百十一回 けれども自然は思つ 第一〇八九六号

(六) 面 11月4日「土曜」→遺墨集⁽¹⁵¹⁾ 67頁→朝日版⁽⁵³⁾
 百五十一 28頁→集成⁽¹⁵¹⁾ 156頁→ゆまに版百五十一 314頁
 315頁→岩波版百五十一 532頁→537頁

明暗 第五百十二回 後は話が存外楽に進 第一〇八九七号

(六) 面 11月5日「日曜」→遺墨集⁽¹⁵²⁾ 67頁→朝日版⁽⁵³⁾
 百五十二 36頁→集成⁽¹⁵²⁾ 156頁→ゆまに版百五十二 316頁
 317頁→岩波版百五十二 537頁→540頁

明暗 第五百十三回 津田の辛防しなけれ 第一〇八九八号

(六) 面 11月6日「月曜」→遺墨集⁽¹⁵³⁾ 67頁→朝日版⁽⁵³⁾
 百五十三 44頁→集成⁽¹⁵³⁾ 156頁→ゆまに版百五十三 318頁
 319頁→岩波版百五十三 540頁→544頁

明暗 第五百十四回 目的の温泉場へ立つ 第一〇八九九号

(六) 面 11月7日「火曜」→遺墨集⁽¹⁵⁴⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾
 百五十四 52頁→集成⁽¹⁵⁴⁾ 156頁→ゆまに版百五十四 320頁
 321頁→岩波版百五十四 544頁→548頁

明暗 第五百十五回 小林と会場の場所は 第一〇九〇号

(六) 面 11月8日「水曜」→遺墨集⁽¹⁵⁵⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾
 百五十五 60頁→集成⁽¹⁵⁵⁾ 156頁→ゆまに版百五十五 322頁
 323頁→岩波版百五十五 548頁→552頁

明暗 第五百十六回 小林は眼を上げて一 第一〇九〇一号

(六) 面 11月9日「木曜」→遺墨集⁽¹⁵⁶⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾
 百五十六 68頁→集成⁽¹⁵⁶⁾ 156頁→ゆまに版百五十六 324頁
 325頁→岩波版百五十六 552頁→556頁

明暗 第五百十七回 「君の様な敏感者か 第一〇九〇二号

(六) 面 11月10日「金曜」→遺墨集⁽¹⁵⁷⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾
 百五十七 76頁→集成⁽¹⁵⁷⁾ 157頁→ゆまに版百五十七 326頁
 327頁→岩波版百五十七 556頁→560頁

明暗 第五百十八回 然し小林の説法には 第一〇九〇三号

(六) 面 11月11日「土曜」→遺墨集⁽¹⁵⁸⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾
 百五十八 84頁→集成⁽¹⁵⁸⁾ 157頁→ゆまに版百五十八 328頁
 329頁→岩波版百五十八 560頁→564頁

明暗 第五百十九回 小林は言葉を継ぐ前 第一〇九〇四号

(六) 面 11月12日「日曜」→遺墨集⁽¹⁵⁹⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾
 百五十九 92頁→集成⁽¹⁵⁹⁾ 157頁→ゆまに版百五十九 330頁
 331頁→岩波版百五十九 565頁→569頁

明暗 第六十回 小林は皆く津田を釣 第一〇九〇六号

(六) 面 11月14日「火曜」→遺墨集⁽¹⁶⁰⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾

百六十 108頁→集成⁽¹⁶⁰⁾ 157頁→ゆまに版百六十 332頁

↓岩波版百六十 569頁

明暗 第六十一回 小林は受け取つたも 第一〇九〇七号

(六) 面 11月15日「水曜」→遺墨集⁽¹⁶¹⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾

百六十一 118頁→集成⁽¹⁶¹⁾ 157頁→ゆまに版百六十一 334頁

335頁→岩波版百六十一 573頁

明暗 第六十二回 それが先刻大通りの 第一〇九〇八号

(六) 面 11月16日「木曜」→遺墨集⁽¹⁶²⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾

百六十二 126頁→集成⁽¹⁶²⁾ 157頁→ゆまに版百六十二 336頁

337頁→岩波版百六十二 578頁

明暗 第六十三回 二人は津田を差し置 第一〇九〇九号

(六) 面 11月17日「金曜」→遺墨集⁽¹⁶³⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾

百六十三 134頁→集成⁽¹⁶³⁾ 157頁→ゆまに版百六十三 338頁

339頁→岩波版百六十三 582頁

明暗 第六十四回 ペンで原稿紙へ書き 第一〇九一〇号

(六) 面 11月18日「土曜」→遺墨集⁽¹⁶⁴⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾

百六十四 142頁→集成⁽¹⁶⁴⁾ 157頁→ゆまに版百六十四 340頁

341頁→岩波版百六十四 586頁

明暗 第六十五回 其時先刻火を点けて 第一〇九一一号

(九) 面 11月19日「日曜」→遺墨集⁽¹⁶⁵⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾

百六十五 152頁→集成⁽¹⁶⁵⁾ 158頁→ゆまに版百六十五 342頁

343頁→岩波版百六十五 590頁

明暗 第六十六回 小林の所作は津田に 第一〇九一二号

(六) 面 11月20日「月曜」→遺墨集⁽¹⁶⁶⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾

百六十六 160頁→集成⁽¹⁶⁶⁾ 158頁→ゆまに版百六十六 344頁

345頁→岩波版百六十六 594頁

明暗 第六十七回 間もなく三人は離れ 第一〇九一三号

(六) 面 11月21日「火曜」→遺墨集⁽¹⁶⁷⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾

百六十七 168頁→集成⁽¹⁶⁷⁾ 158頁→ゆまに版百六十七 346頁

347頁→岩波版百六十七 598頁

明暗 第六十八回 お延の氣を利かして 第一〇九一四号

(六) 面 11月22日「水曜」→遺墨集⁽¹⁶⁸⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾

百六十八 176頁→集成⁽¹⁶⁸⁾ 158頁→ゆまに版百六十八 348頁

349頁→岩波版百六十八 603頁

明暗 第六十九回 汽車が目的の停車場 第一〇九一五号

(六) 面 11月23日「木曜」→遺墨集⁽¹⁶⁹⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾

百六十九 184頁→集成⁽¹⁶⁹⁾ 158頁→ゆまに版百六十九 350頁

351頁→岩波版百六十九 606頁

明暗 第七十回 軽便の中でも、津田 第一〇九一七号

(六) 面 11月25日「土曜」→遺墨集⁽¹⁷⁰⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾

百七十 196頁→集成⁽¹⁷⁰⁾ 158頁→ゆまに版百七十 352頁

↓岩波版百七十 610頁

明暗 第七十一回 霧とも夜の色とも片 第一〇九一八号

(六) 面 11月26日「日曜」→遺墨集⁽¹⁷¹⁾ 68頁→朝日版⁽⁵³⁾

百七十一 204頁↓集成⁽¹⁷⁾ 158頁↓ゆまに版百七十一 354頁
 355頁↓岩波版百七十一 614頁 618頁

明暗 第七十二回 馬車はやがて黒い大 第一〇九一九号

(六) 面 11月27日「月曜」↓遺墨集⁽¹⁷²⁾ 68頁↓朝日版⁽⁵³⁾
 百七十二 212頁↓集成⁽¹⁷²⁾ 158頁↓ゆまに版百七十二 356頁
 357頁(本文は356頁)↓岩波版百七十二 618頁 622頁

明暗 第七十三回 寐る前に一風呂浴び 第一〇九二〇号

(六) 面 11月28日「火曜」↓遺墨集⁽¹⁷³⁾ 68頁↓朝日版⁽⁵³⁾
 百七十三 220頁↓集成⁽¹⁷³⁾ 159頁↓ゆまに版百七十三 360頁
 (361) 頁↓岩波版百七十三 622頁 626頁

明暗 第七十四回 其時不意にがらく 第一〇九二一号

(六) 面 11月29日「水曜」↓遺墨集⁽¹⁷⁴⁾ 68頁↓朝日版⁽⁵³⁾
 百七十四 228頁↓集成⁽¹⁷⁴⁾ 159頁↓ゆまに版百七十四 362頁
 363頁↓岩波版百七十四 626頁 630頁

明暗 第七十五回 最初の彼は殆んど気 第一〇九二三号

(六) 面 12月1日「金曜」↓遺墨集⁽¹⁷⁵⁾ 68頁↓朝日版⁽⁵⁴⁾
 百七十五 6頁↓集成⁽¹⁷⁵⁾ 159頁↓ゆまに版百七十五 364頁
 365頁↓岩波版百七十五 630頁 634頁

明暗 第七十六回 すると其二階にある 第一〇九二四号

(六) 面 12月2日「土曜」↓遺墨集⁽¹⁷⁶⁾ 68頁↓朝日版⁽⁵⁴⁾
 百七十六 14頁↓集成⁽¹⁷⁶⁾ 159頁↓ゆまに版百七十六 366頁
 367頁↓岩波版百七十六 634頁 638頁

明暗 第七十七回 其晩の津田は能く眠 第一〇九二五号

(六) 面 12月3日「日曜」↓遺墨集⁽¹⁷⁷⁾ 68頁↓朝日版⁽⁵⁴⁾
 百七十七 22頁↓集成⁽¹⁷⁷⁾ 159頁↓ゆまに版百七十七 368頁
 369頁↓岩波版百七十七 638頁 642頁

明暗 第七十八回 朝早く男が来て雨戸 第一〇九二六号

(六) 面 12月4日「月曜」↓遺墨集⁽¹⁷⁸⁾ 68頁↓朝日版⁽⁵⁴⁾
 百七十八 30頁↓集成⁽¹⁷⁸⁾ 159頁↓ゆまに版百七十八 370頁
 371頁↓岩波版百七十八 642頁 646頁

明暗 第七十九回 然し探す杯といふ大 第一〇九二七号

(六) 面 12月5日「火曜」↓遺墨集⁽¹⁷⁹⁾ 68頁↓朝日版⁽⁵⁴⁾
 百七十九 38頁↓集成⁽¹⁷⁹⁾ 159頁↓ゆまに版百七十九 372頁
 373頁↓岩波版百七十九 646頁 650頁

明暗 第八十回 室に帰つて朝食の膳 第一〇九二八号

(六) 面 12月6日「水曜」↓遺墨集⁽¹⁸⁰⁾ 68頁↓朝日版⁽⁵⁴⁾
 百八十 46頁↓集成⁽¹⁸⁰⁾ 159頁↓ゆまに版百八十 374頁 375頁
 ↓岩波版百八十 650頁 655頁

明暗 第八十一回 食後の津田は床の脇 第一〇九二九号

(六) 面 12月7日「木曜」↓遺墨集⁽¹⁸¹⁾ 68頁↓朝日版⁽⁵⁴⁾
 百八十一 54頁↓集成⁽¹⁸¹⁾ 160頁↓ゆまに版百八十一 376頁
 377頁↓岩波版百八十一 655頁 659頁

明暗 第八十二回 返事を待ち受ける間 第一〇九三〇号

(六) 面 12月8日「金曜」↓遺墨集⁽¹⁸²⁾ 68頁↓朝日版⁽⁵⁴⁾
 百八十二 62頁↓集成⁽¹⁸²⁾ 160頁↓ゆまに版百八十二 378頁
 379頁↓岩波版百八十二 659頁 663頁

明暗 第百八十三回 室は二間続きになつ 第一〇九三一号

(六) 面 12月9日「土曜」→遺墨集⁽¹⁸³⁾ 69頁→朝日版⁽⁵⁴⁾

百八十三 70頁→集成⁽¹⁸³⁾ 160頁→ゆまに版百八十三 380頁

381頁→岩波版百八十三 664頁→667頁

明暗 第百八十四回 すると清子は其籃を 第一〇九三二号

(六) 面 12月10日「日曜」→遺墨集⁽¹⁸⁴⁾ 69頁→朝日版⁽⁵⁴⁾

百八十四 78頁→集成⁽¹⁸⁴⁾ 160頁→ゆまに版百八十四 382頁

383頁→岩波版百八十四 667頁→671頁

明暗 第百八十五回 斯んな場合に何方が 第一〇九三三号

(六) 面 12月11日「月曜」→遺墨集⁽¹⁸⁵⁾ 69頁→朝日版⁽⁵⁴⁾

百八十五 86頁→集成⁽¹⁸⁵⁾ 160頁→ゆまに版百八十五 384頁

385頁→岩波版百八十五 672頁→675頁

明暗 第百八十六回 「昨夕は失礼しまし 第一〇九三四号

(六) 面 12月12日「火曜」→遺墨集⁽¹⁸⁶⁾ 69頁→朝日版⁽⁵⁴⁾

百八十六 94頁→集成⁽¹⁸⁶⁾ 160頁→ゆまに版百八十六 386頁

387頁→岩波版百八十六 675頁→679頁

明暗 第百八十七回 しばらくして津田は 第一〇九三五号

(六) 面 12月13日「水曜」→遺墨集⁽¹⁸⁷⁾ 69頁→朝日版⁽⁵⁴⁾

百八十七 102頁→集成⁽¹⁸⁷⁾ 160頁→ゆまに版百八十七 388頁

389頁→岩波版百八十七 679頁→684頁

明暗 第百八十八回 津田は清子の剥いて 第一〇九三六号

(六) 面 12月14日「木曜」→遺墨集⁽¹⁸⁸⁾ 69頁→朝日版⁽⁵⁴⁾

百八十八 110頁→集成⁽¹⁸⁸⁾ 160頁→ゆまに版百八十八 390頁

391頁→岩波版百八十八 684頁→688頁

なおこれまでに発表した『漱石作品論集成』関係の文献書誌を以下に掲げる。

一、『漱石作品論集成』総目次

『大阪産業大学論集』人文科学編 第78号 41頁～58頁 大阪産業大学学会 '93(平成5)年3月10日

↓『国文学年次別論文集近代2平成5(1993)年』収録『漱石作品論集成』総目次 36頁～45頁 学術文献刊行会編 朋文出版 '95(平成7)年6月

二、『漱石作品論集成』書誌(一)

『大阪産業大学論集』人文科学編 第81号 27頁～50頁 大阪産業大学学会 '94(平成6)年3月10日

↓『国文学年次別論文集近代2平成6(1994)年』収録『漱石作品論集成』書誌(一) 88頁～100頁 学術文献刊行会編 朋文出版 '96(平成8)年9月

三、『漱石作品論集成』書誌(二)

『大阪産業大学論集』人文科学編 第82号 1頁～25頁 大阪産業大学学会 '94(平成6)年6月10日

↓『国文学年次別論文集近代2平成6(1994)年』収録『漱石作品論集成』書誌(二) 100頁～112頁 学術文献刊行会編 朋文出版 '96(平成8)年9月

四、『漱石作品論集成』書誌(三)

産業大学学会 '06(平成18)年2月28日

「大阪産業大学論集」人文科学編 第83号 49～73頁 大阪産業大学学会 '94(平成6)年9月30日

↓『国文学年次別論文集近代2平成6(1994)年』収録『漱石作品論集成』書誌(三) 113～125頁 学術文献刊行会編

朋文出版 '96(平成8)年9月

五、『漱石作品論集成』書誌(四)

「大阪産業大学論集」人文科学編 第106号 11～23頁 大阪

産業大学学会 '02(平成14)年2月28日

↓『国文学年次別論文集近代2平成14(2002)年』収録『漱石作品論集成』書誌(四) 97～103頁 学術文献刊行会編

朋文出版 '04(平成16)年12月

六、『漱石作品論集成』書誌(五)

「大阪産業大学論集」人文科学編 第107号 1～12頁 大阪

産業大学学会 '02(平成14)年6月20日

↓『国文学年次別論文集近代2平成14(2002)年』収録『漱石作品論集成』書誌(五) 105～111頁 学術文献刊行会編

朋文出版 '04(平成16)年12月

七、『漱石作品論集成』書誌(六)

「大阪産業大学論集」人文科学編 第118号 1～19頁 大阪